

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／小島 明子

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

現在のところ、科研申請テーマとしては「王朝歴史物語の享受と展開」を考えている。具体的には、まず『栄花物語』の伝本の検討が挙げられる。従来、『栄花物語』の伝本としては梅沢本が最善本と見なされ、刊行される注釈書でもこの伝本が使用されることがほとんどであった。ところが近年、梅沢本は梅沢大型本(巻一～二十)と梅沢枳形本(巻二十一～四十)という形態も本文も異なる二種類の伝本の取り合わせ本であるということが新たに注目されるようになってきている。つまり、梅沢本にのみ目を向けた読解では、十分に作品の性格・内容を明らかにすることが難しいのであり、他の伝本を十分に読み込んだ研究が進められるべきである。この点に取り組むことが第一の研究段階である。次に、『栄花物語』を単に文字テキストとして捉えるだけでなく、『栄花物語絵巻』や奈良絵本『栄花物語』などの絵画テキストを検討の対象としてゆく。絵画テキストは単なる文字テキストの挿絵ではなく、制作された時代背景・場の文脈を顕著に反映したものであると考えられる。美術・歴史学などの近接分野の研究成果とクロスさせながら、『栄花物語』の享受と展開の実態を明らかにするのが第二の段階である。

2. 点検・評価

科研の基盤研究(C)(一般)として、『栄花物語』本文の変容と再構築についての研究(代表:小島明子)の研究課題名で申請を行った。10月に申請を行った後、来年度に向けてその研究の一端となる基礎的な作業に着手し始めている。また、所属する言語系コース(国語)の幾田伸司准教授が代表となって申請予定の基盤研究(B)(一般)「言語活動企画力の習得を図る国語科教師教育カリキュラムの構築」にも共同研究者として参加している。こちら、大学院の後期の授業「教育実践フィールド研究」の中で、科研の当該テーマの雛形となり得る活動を展開できた。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

言語系コース(国語)では、平成24年度大学院入学者は私費外国人留学生1名を含め17名と見込まれていて、これは平成23年度入学者の13名に比して4名増の状況である。今後も同様に定員を確保するためには、コース所属教員と連携しつつ、以下の取り組みを行う。

- ①他大学の教員訪問を実施し、本学のカリキュラムの特徴、教学環境のよさ、教員採用実績などを十分に説明する。教職に就くことを志望し、かつ進学を望む学生がいる場合、本学を受験してもらえるよう良好な関係を構築する。
- ②学部学生全体に大学院進学後の学びの現状、メリットなどを説明する機会を設け、ストレートマスターの受験者を増やせるようにする。
- ③教員採用試験に合格し、卒業後、教職に就くことが決まった学部学生に、中堅教員となって後、大学院に戻って来て勉強をすることの意義をくり返し説明する。

2. 点検・評価

①について

他大学の教員、特に文学部の教員と学会・研究会などで会う機会には、大学院受験者を送ってもらえるよう説明し、国語の教員として正規に採用されるには、文学部の学部で4年間学んだ後、本学大学院で教育に関する力を高めることが理想的であることをアピールした。

②について

小島が担当する4年生のゼミ生を勧誘した。うち1名が中期大学院入試を受験して合格し、言語系コース(国語)の修士課程に進学した。

③について

小島の担当する4年生のゼミ生で、石川県中学校・高等学校(一括採用)の教員採用試験の合格者が出たが、この学生には将来的に専修免許を取得するため本学大学院に戻ってくるよう強く勧誘した。

しかしながら、平成24年度の大学院入試では前期試験合格者5名、中期試験合格者6名、後期試験合格者0名に留まり、そのうち入学辞退者2名が出て、入学は9名となった。この数値については反省せざるを得ない。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ①1年生の学年担任として、新入生が本学に適応できるよう助言・指導を行う。また必要な場合には、個人的な相談にも応じる。
- ②演習科目だけでなく、講義科目においても学生が主体的に学習に取り組めるよう、思考・記述・発表の要素を含んだ課題に取り組ませ、知識・スキルの定着を図る。
- ③新学習指導要領に盛り込まれた「伝統的な言語文化」の授業を展開する力を学生が身につけることができるように、教材・授業方法などを工夫する。

2. 点検・評価

- ①について
1年生の学年担任として、前期には「初等中等教育実践基礎演習」を担当し、学生が問題なく高校生活から大学生生活に移行できるような学問的指導を行った。また個人的な相談を求める学生がいたが、できる限り丁寧に対応し、問題解決に助力した。
後期には、進路変更を希望する学生1名に対して、保護者を含めて数度の面談を行い、共に問題点を考えていった。結局、当該学生は他大学の編入試験に合格したものの、本学に残る道を選択している。
- ②について
前期・後期に講義科目をそれぞれ担当したが、その際、必ず最後にその日の授業に関わる「課題」を個別に取り組ませ、次週に解説し、知識を深めてゆけるように授業を組み立てた。
- ③について
後期の学部2年生対象の「国文学Ⅱ」では「古典文学史」のわかりやすい講義を実施した。新学習指導要領において「伝統的な言語文化」の学習が小学校においても盛り込まれたことから、中学校教育専修の学生のみならず、小学校教育専修の学生であっても、古典文学への知識が要求されることになっている状況に対応したものである。

II-2. 研究

1. 目標・計画

- ①これまで実施してきた中世の歴史物語研究を踏まえつつ、平安時代の歴史物語である『栄花物語』『大鏡』などの作品研究に取り組む。その際、近接諸分野の最新研究成果に十分目配りをして、従来の枠組みにとらわれないテーマ設定をめざす。
- ②上述のテーマによって単著論文を執筆、投稿し、同時に科研申請も行う。

2. 点検・評価

- ①について
『栄花物語』の異本系統とされる「富岡甲本」と、従来最善本とされてきた「梅沢本」を対照して読解を進めている。概ねは「富岡甲本」は「梅沢本」より簡略化の方向にあることがまず確認できたが、反面、大きな増補本文を有する箇所があることにも気づかされている。この増補本文が作られた文化的背景について調査を進めた。これについては、3月9日に行われた平成24年度鳴門教育大学学術研究会で、その成果の一部を口頭発表した。
- ②について
①のテーマにより科研の基盤研究(C)(一般)に、『栄花物語』本文の変容と再構築についての研究(代表:小島明子)の研究課題名で申請を行った。また、①について、現時点での見解を盛り込んだ単著論文を執筆し、審査を有する学術雑誌に投稿した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①所属の専攻・コースの運営が大学運営の土台であることから、コースの教員と連携し、言語系コース(国語)の業務・行事などの遂行に努める。
- ②昨年度から継続して大学院入試委員として、大学院入試が円滑に実施されるよう尽力し、大学院入学者定員の充足をめざす。
- ③今年度より職員労働環境協議会の過半数代表者委員に任命されることとなり、新たな委員として職務を適切に実施する。

2. 点検・評価

- ①について
言語系コース(国語)では、前期は村井万里子教授の内地研修と、近現代文学担当教員の欠員によって、業務・行事の遂行にやや困難もあったが、現有のコース教員の団結と努力でその事態を乗り切った。後期は、国語科教育学の教員3名、国語学の教員2名、国文学の教員2名、日本語教育学の教員2名、合計9名のフルメンバーとなり、コース全体の運営や学生指導にも活気が出てきたと思われる。
- ②について
大学院入試委員として、3回の大学院説明会に積極的に取り組んだ。また前期・中期・後期の合計3回の大学院入試の円滑な実施・運営に努めた。
- ③について
職員労働環境協議会の過半数代表として、国家公務員の退職手当の支給水準への対応、人事関係諸規則などの改正などに関して、学長・理事との交渉の場に臨んだ。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- 本学に着任後1年が経過し、附属学校との連携のあり方がいづらか見えてきた段階であり、本年度は以下を目標とする。
- ①附属学校での研究発表会、附属学校の教員との連絡協議会に参加し、現場の先生方と連絡を密にし、かつ現場の状況について十分に理解を深める。
 - ②教育実習期間に積極的に附属学校に行き、学生の授業を参観、その問題点・課題などを把握し、属学校の先生方と相談の上、適切な指導を行う。

2. 点検・評価

- ①について
教育実習期間の後、学部2年生の「初等中等教科教育実践Ⅱ」(村井教授と共同授業)の中で、2回附属中学校に行き、学部生と中学生の百人一首、学部生により「古典パフォーマンス」の実施を行った。その際、附属中学校の先生と共に指導にあたった。また大学院の授業「教育実践フィールド研究」では、附属小学校において3日間院生が授業を行ったが、その準備段階として、授業案の指導を附属小学校の先生と連携して行うことができた。
 - ②について
9月の教育実習期間には附属小学校・中学校に数度足を運び、学生の授業参観をし、助言・指導を行った。
- それ以外
平成25年2月21日、鳴門高等学校の学問系統別ガイダンスの講師として「文学部を目指す生徒へ—文学部の学びについて—」という題目で講義を行った。教員志望学生も参加していたので、カリキュラムや指導状況などの点において文学部と教育学部のそれぞれの特徴についても詳しく説明し、また生徒の質問にも対応した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

- 学長の定める重点目標である科研費の申請を研究責任者としても、分担研究者としても行った。
- 大学院の定員充足のため、3月まで学部4年生であったゼミ生を勧誘し、その結果、当該学生はこの4月に大学院生として入学した。
- 平成24年度入学生のクラス担任として、クラスの学生が大学生活にスムーズに移行できるよう授業において指導を行い、さらに個人面談なども実施した。
- 大学院入試委員として、また職員労働環境協議会の過半数代表として、職務を積極的に推進した。